

九州大学附属図書館における蔵書印画像の収集と公開について

相部, 久美子
九州大学附属図書館医学図書館閲覧係

梶原, 瑠衣
九州大学附属図書館図書館企画課企画係

古賀, 京子
九州大学附属図書館医学図書館参考調査係

星子, 奈美
九州大学附属図書館図書館企画課企画係

他

<https://doi.org/10.15017/1812929>

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2016/2017, pp.37-48, 2017-08. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

報告

九州大学附属図書館における蔵書印画像の収集と公開について

相部 久美子[†] 梶原 瑠衣[‡] 古賀 京子[§] 星子 奈美^{**} 山根 泰志^{††}

<抄録>

九州大学附属図書館では、近年の図書館員の関心の高まりにより、所蔵資料に押印された蔵書印の画像収集や印主の調査が行われてきた。それらの成果を公開するデータベースとして「蔵書印画像」ブラウザ画面を公開している。本稿は、そうした蔵書印収集と公開による様々な成果や事例を報告し、その意義を示すものである。また、特筆すべき例として、近年発見された、医学史・デザイン上極めて価値の高い「ショイベ文庫」の蔵書票について紹介する。

<キーワード> 蔵書印, 蔵書票, 九州大学蔵書印データベース, 「蔵書印画像」ブラウザ画面, 医学図書館, 大学史, 医学史, 書誌学, ボート・ショイベ, Heinrich Botho Scheube

Collection of Ownership Stamp Images at Kyushu University Library

AIBE Kumiko KAJIWARA Rui KOGA Kyoko HOSHIKO Nami YAMANE Yasushi

1. はじめに

蔵書印は、所蔵者がその所有を表す目的で収蔵典籍書画類に押捺したものであり、資料の伝来を示す有力な証拠となり、その資料の価値を大きく左右する。印文や意匠は、所蔵者の人柄や趣味をも端的に反映するため、鑑賞の対象としても十分な価値を有する。

蔵書印の印影や使用者の情報を収集した蔵書印譜は、江戸時代より刊行されており、その集大成が日本書誌学大系の『新編蔵書印譜』・『新編蔵書印譜 (増訂)』であろう。これらは、鑑定考証や鑑賞を主な目的とするため、著名な使用者や特徴的な意匠を持つ蔵書印が優先的に採録される。そうした蔵書印譜が採録してこなかった、判読困難な印影の痕跡や書肆印まで網羅的に蔵書印を収集しているのが、国文学研究資料館が平成24(2012)年に公開した「蔵書印データベース」である(青田2016)。

九州大学附属図書館(以下、当館)では、近年の図書館員の関心の高まりにより、所蔵資料に押印された蔵書印の画像収集や印主の調査が行われてきた。その蓄積により、平成21(2009)年に「九州大学蔵書印データベース」を公開し、平成28(2016)年には「蔵書印画像」ブラウザ画面としてリニューアルした。

本稿では、まず当館における蔵書印収集とデータベース構築に至るまでの経緯を述べ、公開した「蔵書印画像」ブラウザ画面のシステムと検索機能を説明する。次に、これまでの蔵書印画像の収集と公開による成果を紹介する。続いて、医学図書館を中心に進めている九州大学関係の蔵書印収集からその学史的な意義について述べる。最後に、近年発見された、医学史・デザイン上極めて高い価値を有する「ショイベ文庫」の蔵書票について紹介する。本稿は、これらの報告により、図書館が蔵書印を収集し、公開することの意義を明らかにするものである。

2. 蔵書印画像収集の経緯

2.1. 蔵書印への関心の高まり

九州大学中央図書館にある総合目録カードのうち、戦前の古いカードには、当時の図書館員による書誌学的・学術的に極めて重要な書き込みが残されていることが多く、特に裏面には蔵書印についての記述をしばしば見ることができる。創設期の図書館員にとって、蔵書印の価値の高さは周知のものであったことが窺えるが¹、戦後の目録カードにはそうした書き込みは見られなくなる。

[†] あいべ くみこ 九州大学附属図書館医学図書館閲覧係 (〒812-8582 福岡市東区馬出 3-1-1) E-mail: aibe.kumiko.903@m.kyushu-u.ac.jp

[‡] かじわら るい 九州大学附属図書館図書館企画課企画係 (〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号) E-mail: kajiwara.rui.351@m.kyushu-u.ac.jp

[§] こが きょうこ 九州大学附属図書館医学図書館参考調査係 (〒812-8582 福岡市東区馬出 3-1-1) E-mail: koga.kyoko.676@m.kyushu-u.ac.jp

^{**} ほしこ なみ 九州大学附属図書館図書館企画課企画係 (〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号) E-mail: hoshiko.nami.463@m.kyushu-u.ac.jp

^{††} やまね やすし 九州大学附属図書館利用支援課サービス企画係 (〒819-0395 福岡市西区元岡744番地) E-mail: yamane.yasushi.188@m.kyushu-u.ac.jp

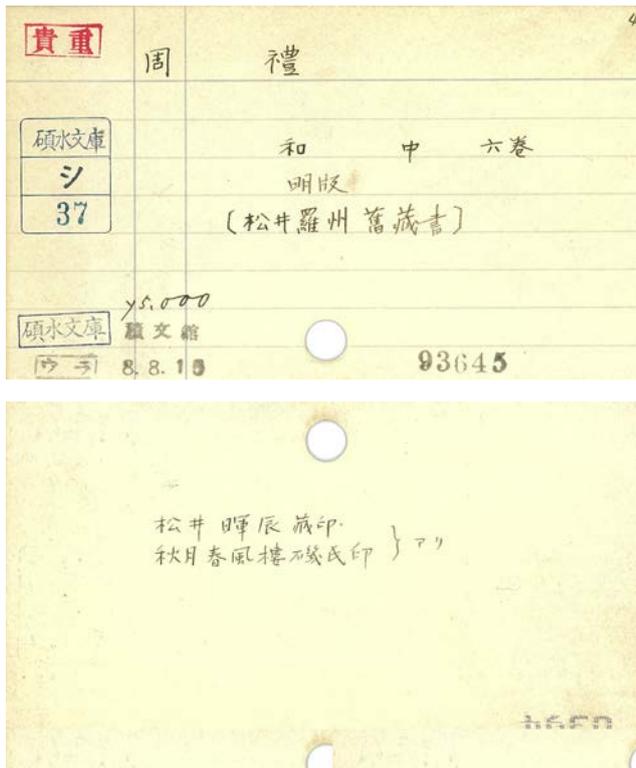


図1 戦前の総合目録カード

当館において改めて蔵書印への関心を高める契機となったのは、平成19(2007)年10月から平成23(2011)年3月まで開催された貴重文物講習会である。貴重文物講習会は、本学が所蔵する貴重資料に関して認識を深めること、図書館員の専門性を高めることを目的として、各貴重文物に深く関わった学内外の講師が、その内容や価値、本学が所蔵するに至った経緯等について講義するものである。貴重文物講習会を通じて、図書館員が所蔵資料の来歴や蔵書印に意識を払うようになり、埋もれていた貴重資料の発見にも繋がっていった。

2.2. 蔵書印データベースの構築

当館では和漢古書の目録データ作成の際に蔵書印を注記に入力しているが、積読に時間がかかる上、同じ蔵書印が何度出ても情報が共有化されていないため、効率的に入力ができないという問題があった。また、前述のように、蔵書印への関心の高まりにより、重要な蔵書印がいくつも発見され、デジタルカメラやスキャナの普及により画像データも蓄積されつつあったが、それを公開する手段がなかった。そこで、それら蓄積された画像をデータベース化し、平成21(2009)年3月から「九州大学蔵書印データベース」として公開し

た。目録データ作成の際の参考に供するだけでなく、本館蔵書の来歴を明らかにし、その奥深さを広く学内外に伝えることを目的とするものであった。

あくまで図書館員有志による画像の蓄積に委ねられており、劇的にデータ件数が増えることがないことは当初から予想されていたため、将来網羅的に全国の蔵書印を収集・公開するデータベースが構築されることを期待して(幸いそれは国文学研究資料館の蔵書印データベースにより実現された)、力点を九州大学ならではの情報の公開に置いた。すなわち、当時中央図書館内で存在が明らかになった九州・福岡の漢学者の諸文庫(樋口文庫・近藤文庫・西田文庫・逍遙文庫)及び私立福岡図書館の旧蔵書を中心とする廣瀬文庫等の簡易目録を作成しており(山根 2008, 2014)、その過程で得られた蔵書印画像を初期コンテンツとして重点的に登録し、他地域では得られない蔵書印及び印主の情報の公開につとめた。印主情報も、『新編蔵書印譜』に掲載されているような著名な印主の場合は簡略に記載し、九州・福岡でしか知られていない印主の場合は可能な限り詳細に記載した。

印文が正確に積読できない、あるいは印主を特定できない蔵書印も多いが、そうしたデータも敢えて公開することで、学外の研究者の方から正しい積読をご教示いただき、印主の特定に結びついたこともあった。蔵書印の印主は時代・地域ともに多様を極めており、その特定や詳細な経歴の解明には限界があるが、不完全でもデータを公開することで、全国の研究者、郷土史家等の協力を仰ぐことも可能となる。

3. 蔵書印画像の公開

3.1. 「蔵書印画像」ブラウザ画面

「九州大学蔵書印データベース」は、本学附属図書館の図書館業務システム更新に伴い「蔵書印画像」ブラウザ画面としてリニューアルし、平成28(2016)年4月に公開した。データ管理には、CMS社製の図書館業務システム E-CatsLibrary v5 の「メタデータ管理」モジュールを使用し、オープンソースの eXtensible catalog (XC) をベースとした本学のディスカバリーサービスである「九大コレクション」のブラウザ画面の1つとして公開している。



図2 九大コレクション「蔵書印画像」ブラウザ画面

3.2. 蔵書印データの管理

E-CatsLibrary v5 の「メタデータ管理」モジュールでは、機関リポジトリの論文データや貴重資料の画像データなど、多様なデータを管理しており、蔵書印データもそのうちの1つである(林 2016)。あらゆるデータに共通する「九大スキーマ」を持ちつつ、データの性質に応じたサブスキーマを設定することが可能であり、蔵書印には seals (蔵書印画像) というサブスキーマを使用している。

サブスキーマ seals が定めるデータ項目は下記のとおりで、リニューアル以前からのデータ定義を踏襲している。

- 言語
- 印文
- 印文ヨミ
- 印主名 (印主の別名も含む)
- 印主名ヨミ
- 西暦
- カテゴリ
- 地域
- 活動年代
- 西暦 (範囲)
- 関連蔵書印
- 字数
- 輪郭
- 印主情報

上述のサブスキーマに則りメタデータを作成し、撮影した蔵書印の画像とともに登録することにより、「九大コレクション」のブラウザ画面からデータが公開される。なお、E-CatsLibrary v5 では、複数のメタデータと画像を一括登録することも可能である。

3.3. 蔵書印データの公開

「九大コレクション」のブラウザ画面は、下記の検索機能を有している。

- 1) 簡易検索

検索窓にキーワードを自由に入力して検索する。

- 2) 詳細検索

カテゴリ、印文、印主名、印主名ヨミ、年代、字数のいずれかを条件として検索する。

- 3) ファセット検索

カテゴリ、印主名ヨミ、字数について、一覧から絞り込んで検索する。印主名ヨミは、五十音からの絞り込みとなっている。字数については、印に記された文字を判読できない場合も、文字数を手がかりとして検索できるよう考慮したもので、「蔵書印画像」ブラウザにおいて特徴的な検索機能である。



図3 印主名ヨミでのファセット検索

なお、「九大コレクション」全体の検索機能を用い、蔵書印以外のコンテンツとともに統合的に検索することも可能である。

このようにして検索した結果から、蔵書印の画像とメタデータを参照することができる。

4. 蔵書印画像収集及び公開の成果

前述のように、蔵書印の収集は図書館員の有志に委ねられており、これまで収集・公開された蔵書印は 829 件(平成 29 年 7 月 1 日現在)に過ぎないが、それでも様々な成果に結びついている。本章ではそれらをいくつか紹介したい。

4.1. 従来の蔵書印譜の修正

これまで刊行されてきた蔵書印譜に記載された印文や印主は、推測を交えていることもあるため、必ずしも正確なものとは限らず、多くの事例の蓄積により修正されていくべきものである。当館収集の蔵書印により、従来の蔵書印譜を修正する事例を紹介する。

- 1) 「画餅居士蔵書之記」

『国立国会図書館蔵書印譜』は「画餅居士蔵書之記」の印主を江戸後期の儒学者中島棕隠(号の一つに画餅

居士がある)とし、『新編蔵書印譜』・『新編蔵書印譜(増訂)』もそれを踏襲する。「画餅居士蔵書之記」と「太田氏蔵書記」の押印がある医学図書館眼科教室旧蔵狩野本『医之辨』に、「画餅居士太田正隆」の墨書があることから、実は漢方医・小児科医で、明治期に漢方存続に尽くした太田正隆(1846~1922)の蔵書印であることが判明した²。



図4 「画餅居士蔵書之記」印

2) 「敬甫」

『書陵部蔵書印譜』は「敬甫」の印主を明治時代の儒学者島田篁村(字が敬甫)とし、『新編蔵書印譜』・『新編蔵書印譜(増訂)』もそれを踏襲する。この印が押された近藤文庫『延平答問』のカード目録には、蔵書印と見返しの「延平答問仲村惕斎先生所賜也」という墨書から、江戸前期京都の朱子学者である中村惕斎(1629~1702)旧蔵と記載されている。確かに、閑谷学校に所蔵される惕斎旧蔵『扶桑略記』にも同印が認められることから(岡山県教育委員会 1980, 柴田 1983), カード目録が正しかったことがわかる。



図5 「敬甫」印

4.2. 蔵書印による蔵書群の復元

どのような著名な人物や機関の蔵書といえども、旧観をそのまま現在まで維持していることは稀であり、ほとんどが散逸している。近年では、そうした散逸し

た人物や機関の旧蔵書を復元して、蔵書全体を分析する研究が各分野で非常に盛んとなっており、そのために蔵書印が大きな手がかりとなっている。そうした事例の一つを紹介する。

1) 「秋月春風楼磯氏印」

明治9(1876)年の秋月の乱の謀主の一人磯淳(1827~1876)は、自刃直前に妻に書いた遺書に家宝として古写本玉篇、皇侃写本をあげて、その行く末を案じた(黒龍会 1911, 山室 1995)。前者の古写本玉篇は最終的に早稲田大学図書館に帰し、国宝に指定されている。早稲田大学図書館(当時)の久保尾俊郎氏は、後者の皇侃写本の行方を調べられていく中で、全国に分散した磯淳旧蔵書の所在を明らかにされていた。前述の九州・福岡の漢学者諸文庫の調査により、磯淳の旧蔵書が九州大学に大量に所蔵されていることがわかり、蔵書印データベースなどでその情報を公開していたため、久保尾氏の論稿に大いにご活用していただいた(久保尾 2010)。

磯淳の蔵書印「秋月春風楼磯氏印」は、逍遙文庫、碩水文庫、近藤文庫、益田文庫、樋口文庫など、磯と多少なりとも関係があった漢学者の旧蔵書に見出すことができる。明刊本等貴重書を数多く含み、九州大学における漢籍善本の中核を担っており、無念の最後を遂げた磯淳の見識の高さを今に伝えている。



図6 「秋月春風楼磯氏印」印

4.3. 著名人の蔵書印の発見

著名な人物の旧蔵書は珍重され、図書館などでも貴重書として取り扱われることが多いが、誰もが知っている人物の旧蔵書にも関わらず、貴重書として扱われず、通常の図書の中に埋もれている場合もある。それを蔵書印により発掘した事例を紹介する。

1) 「島崎春樹」

西田文庫『山陽文稿』・『宋三家詩話』の2部に押印されている。島崎春樹といえ、明治の文豪島崎藤村(1872~1943)の本名であるが、現在伝わっている藤村の蔵書印には「島崎春樹」の印は確認されていない³。しかし、『山陽文稿』の末尾には父である正樹(1831~1886)の印⁴と、「明治四年辛未孟冬落合驛鈴木頼道

主所贈也 馬籠驛 島崎氏」という識語があることから、藤村の蔵書印であることは疑いない。藤村は幼き頃正樹から漢籍の手ほどきを受けており、その折に父から貰ったものか、あるいは明治 24 (1891) 年に祖母の葬式で馬籠に帰郷した際に、藤村は父の蔵書を持ち出しており (勝本 1979)、その折に入手したものかもしれない。藤村は、若い頃に読んでいた和漢書の多くを手放していたようであり (勝本 1979)、「島崎春樹」の蔵書印が現在伝わっていないのは、若い頃に用いていたものであることを推測させる。

これらは若き藤村が漢詩・漢文を学ぶ姿を窺うことができる点で、極めて貴重な書物であり、それが遙か遠く九州福岡の西田家に伝わったことも興味深い⁵⁾。



図7 「島崎春樹」印

2) 「勝安房」

写本『筆のすさみ』(江戸後期の国学者長野美波留の歌書)に押されていた幕臣勝海舟(1823~1899)の蔵書印である。海舟は幕末期には安房守に任ぜられたことから勝安房(かつあわ)と呼ばれていたが、維新後は安房(あほう)と同じ音の安芳と変えた。斜めに傾けて印を押すところも海舟の特徴である。この本は、もう一つの蔵書印「大島氏図書」から源氏物語の写本の収集家で知られる三井合名会社理事の大島雅太郎(1868~1948)の手に渡ったことがわかるが、海舟も源氏物語古写本を収集していたことで知られる。歌や物語に傾倒した海舟の意外な側面が浮かび上がるだろう。

写本『筆のすさみ』は、伊都キャンパスの新中央図書館の自動書庫のコンテナの中から、偶然発見されたものである。箱崎の中央図書館にあった時は、誰でも手に取れる開架の書庫に配架されていたと推定され、他の洋装本とともに新中央図書館に移転されたものであろう。この写本は昭和 13 (1938) 年に古書店の山水堂から購入したものだが、カード目録の裏面には「勝海舟手摺本」という書入れがあり、受入当初は勝海舟の旧蔵書であることは認識されていたことがわかる。それがいつしかわからなくなり、他の和本のように別置されることなく、忘れ去られていたものであろう。



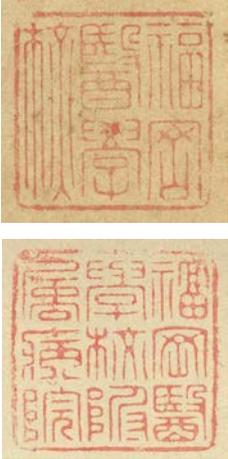
図8 「勝安房」印

5. 蔵書印に見る九州大学の変遷

蔵書印は書誌学的な点だけでなく、大学史の側面から見ても貴重な情報源となる。九州大学のルーツは、明治 44 (1911) 年創立の九州帝国大学、明治 36 (1903) 年創立の京都帝国大学福岡医科大学、明治 21 (1888) 年開院の県立福岡病院、明治 12 (1879) 年開設の福岡医学校、と遡ることができる。現在の医学図書館には、医学系各教室から搬入された様々な由来の図書が収蔵されており、蔵書印から九州大学の変遷や歴史を窺うことができる。

5.1. 九州大学の前身

	<p>養生館 (1867~1872) 福岡藩が西洋近代医学の実践を担う人材を育成するために藩校養生館を福岡市中央区大名に設立。廃藩置県の翌年に廃校。</p>
	<p>福岡医院 (1877~1879) 養生館の廃校後、藩校修猷館内に診療所を設置していたが、医師養成のための病院として福岡医院が博多中島町岡新地に建設された。</p>

	<p>福岡医学校（1879～1888） 福岡病院が廃止され、同所に医学校を設置し病院を附属させた。</p>		<p>九州帝国大学医学部眼科学教室（1919～1947） 帝国大学令の改訂により、帝国大学は複数の学部によって構成するものとされ、九州帝国大学には医学部、工学部、農学部がおかれることになった。1922年に附属図書館、1924年に法文学部、1939年に理学部が箱崎地区に設置された。</p>
	<p>県立福岡病院（1888～1903） 医学校が廃校となり、附属病院を主体に開始。福岡県筑紫郡千代村堅粕（現在九州大学医学部所在地）に設置。大森治豊を院長とする。</p>		<p>九州大学医学部眼科学教室（1947～） 太平洋戦争の終結に伴い、帝国大学の官制が廃止され、新制九州大学が発足した。1949年に法文学部から法学部、文学部、経済学部が独立し、教育学部が設置され、8学部となった。</p>
	<p>京都帝国大学福岡医科大学（1903～1911） 県立福岡病院の敷地に施設と人員を引き継ぎ、京都帝国大学の一分科として福岡医科大学を創設。大森治豊が同大学教授に任ぜられ、学長兼附属医院長に補された。</p>	<p>5.3. 教授名を冠した教室印</p> 	<p>第一外科初代教授三宅速（在任：1904～1927） 日本における外科学の開拓者。ドイツの理論物理学者アインシュタイン博士と親交があった。</p>
	<p>九州帝国大学（1911～1947） 京都帝国大学から離属し、福岡医科大学は九州帝国大学医科大学と改められた。新たに糟屋郡箱崎町に工科大学を設置し総合大学となった。</p>		<p>第二内科二代教授武谷廣（在任：1910～1935） 臨床を大切にし、“臨床の二内科”としての基礎を築いた。</p>
	<p>九州帝国大学（1911～1947） 京都帝国大学から離属し、福岡医科大学は九州帝国大学医科大学と改められた。新たに糟屋郡箱崎町に工科大学を設置し総合大学となった。</p>		<p>第二内科四代教授勝木司馬之助（在任：1956～1971） 脳血管障害のコホート研究である久山町研究を始めた。</p>

5.2. 教室印の変遷にみる九州大学の歴史

	<p>九州帝国大学医科大学眼科教室（1911～1919） 福岡医科大学が九州帝国大学医科大学に移属した時の講座数は、眼科学、病理学、耳鼻咽喉科学等、22講座であった。</p>
---	--

5.4. 機関蔵書印を収集・調査する意義

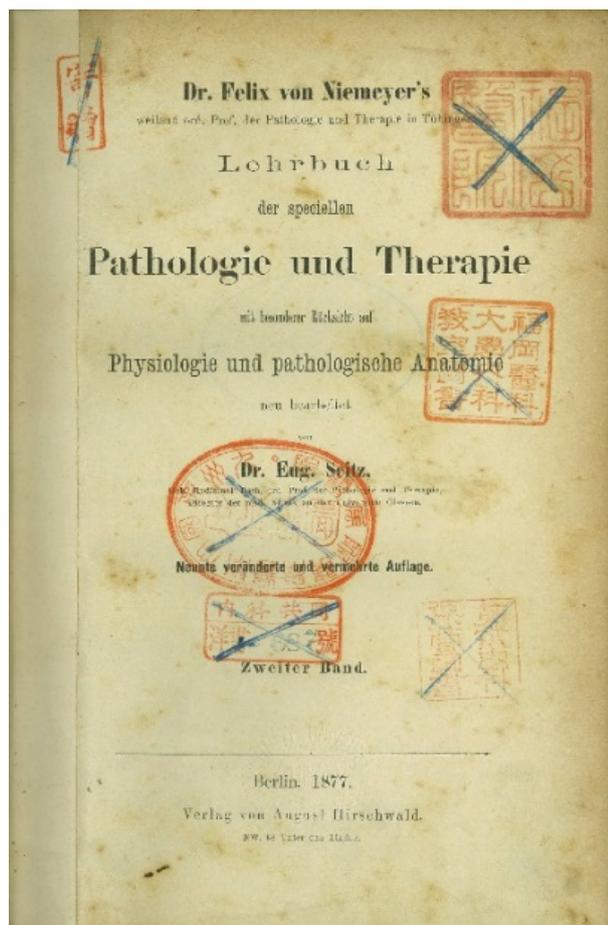


図9 蔵書印から見る所蔵機関の変遷

資料に押された蔵書印をたどることで、その資料の所蔵者の遍歴を見ることができるが、それは個人だけでなく、機関の場合も大きな意味を持つ。特に九州大学のように何度も組織を変え名称を変えて成立した機関にとっては、その蔵書印には歴史的な価値がある。例えば図9の資料では、「福岡医院」→「福岡医科大学内科教室」→「九州帝国大学医学部附属医院」・「第貳内科」と代々の所蔵機関の印が押されており、その変遷を追うことができる。

「福岡医学校」等、九州大学の前身機関については大学史や年表等に記載があるが、その建物は現存せず資料も乏しい。「福岡医院」も資料によっては「福岡病院」と表記されていることもあり、「県立福岡病院」と混同しやすく曖昧な認識になりがちである。しかし実際に本に押された蔵書印により、その機関の同時代的な名称を確認することができ、また確かにその機関が存在したのだと実感することができる。「福岡医院」と「福岡医学校」の印はデザインも似ており、その継承性をうかがわせる。

蔵書印には個性が現れる。個人の蔵書印では、そのデザインや大きさ、号など印文の内容で印主の性格を

感じることができる。機関名の場合も、ある程度の型は決まっているとはいえ、それぞれ個性がある。例えば、「九州帝国大学図書印」は複数種あるが、九州帝国大学草創期（1911～1925）、病院地区にあった図書閲覧室で使われていたものは、最も大きく6cm×6cmの大判であり、九州初の帝国大学としての意気込み、権威といったものを感じさせる。その後箱崎地区に附属図書館が設置されてからは、印は小さくなっていく。ちなみに帝国大学（東京大学の前身）の「帝国大学図書之印」はさらに大きな7.8cm×7.9cmである。この印が押されているのは、昭和27年に東京大学衛生学教室から九州大学医学部薬学科図書室に寄贈されたものである。



図10「九州帝国大学図書印」 図11「帝国大学図書之印」

京都帝国大学福岡医科大学時代の印については、今まで出てきたものはすべて「福岡医科大学〇〇教室」となっており、「京都帝国大学」と冠している印は見つかっていない。単に印文が長くなるからというだけかもしれないが、京都帝国大学の一分科大学ではなく、独立した大学なのだという意識の表れかもしれない。

6. ショイベ文庫と蔵書票

図書の所蔵者を明らかにする手段として、東洋においては中国古代に誕生した蔵書印が発達したのに対し、西洋においては15世紀半ばに誕生した蔵書票が絵画的芸術性を帯びながら発展した。当館においては、蔵書印だけでなく、蔵書票も収集の対象としているが、今のところ収集数は極めて少ない。その中でも、近年発見された、医学史・デザイン上極めて高い価値を有する「ショイベ文庫」の蔵書票について報告する。

6.1. ショイベ文庫

医学図書館は書庫狭隘化問題の対応策として旧工学部4号館の209号室及び他3室に1740箱のダンボール箱に詰めた書籍を保管していた。平成25(2013)年12月に209号室の内部屋に保管していたダンボール箱70箱の内、箱の外側に「宮入」、「貴重書」、「保留」と記載されているダンボール箱65箱を医学図書館に移動

した。それらの箱の中から「Dr. Botho Scheube」⁶と記載されている蔵書票が貼られた資料が 22 冊見つかった。22 冊の中には見返し等に「重複本」と鉛筆書きされ、「消印」が押された本もあった。蔵書票について調査すると、明治 10 (1877) 年に来日し京都療病院 (京都府立医科大学前身) で診療・教育に携わったお雇い医師ポート・ショイベの蔵書票である事が判明した (森本 2011)。次年度の平成 26 (2014) 年 10 月から 12 月に、旧工学部 4 号館 209 号室及び 415 室に保管されているダンボール箱の中の資料の調査・選定を 7 回に分けて行い、新たに発見された 17 冊のショイベ旧蔵書を含んだ 366 冊を医学図書館に移動した。ショイベ蔵書票の存在判明後医学図書館 3 階保存書庫の衛生学教室からの移管図書、雑誌書架配架の雑誌及び貴重図書室の「貴重古医書コレクション」の中に多数のショイベ蔵書が含まれているのが判った。「衛生学教室」の図書原簿によれば、「ショイベ文庫」の受入情報は以下の通りである。

受入日: 昭和 7 (1932) 年 4 月 15 日

受入冊数: 788 冊

購入金額: 1845 円 52 銭

備品番号: 10301 (一括)

(原簿によると同文庫の中から昭和 8 (1933) 年 9 月 3 日に病理学教室に 21 冊, 赤岩外科教室に 15 冊, 生ノ松原分院に 20 冊移管されている)

「ショイベ文庫」購入当時の衛生学教室の教授は大平徳三であるが、衛生学教室の初代教授で寄生虫学者としても著名な「宮入慶之助 (1865~1946)」が明治 24 (1891) 年から 27 (1894) 年までショイベと同じ京都医学校 (京都府立医科大学前身) 教諭 (宮入慶之助記念誌編集委員会 2005 p.261) であり、研究分野も寄生虫・結核・脚気・マラリア・栄養・衛生とショイベと重なる部分が多い。衛生学教室で「ショイベ文庫」を購入した経緯には宮入慶之助に関わった可能性も考えられる。

2014 年度に前述のように旧工学部から移動した「ショイベ旧蔵書」39 冊と医学図書館の保存書庫及び機械室等で見つかった未整理のショイベ旧蔵書を「ショイベ文庫」として目録整理し展示室に「ショイベ文庫コーナー」を作った。またその後「ショイベ蔵書票」、自筆サイン、備品番号等でショイベ旧蔵書である事が確認できた資料は、目録データに文庫名を追加し現在 153 点が登録され、コレクション名で検索できる。

(<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/scheube>)

ショイベの蔵書表には日本画・版画などで日本の象徴として描写される富士山・神社の赤い鳥居・松等が描かれている。ショイベの日本滞在期間は 4 年間で帰国後再来日の機会は無かったが、滞在中には富士登山

を楽しんだり箱根神社や日光東照宮、高野山を訪れたりしている。ショイベが日本から持ち帰った工芸品などは絵画も含め 754 点に及んでいる (森本 2011 p.300)。

「ショイベ文庫」には蔵書票の他に蔵書印も見られるが、ライプツィヒ (LEIPZIG) と京都 (KIOTO) の 2 パターンがある。ライプツィヒの蔵書印が押されている図書の出版年は「1875 年 (来日前)」「1884 年 (来日後)」で、京都の蔵書印の方は「1878 年 (京都療病院勤務)」で来日中に購入した書籍である。

「ショイベ文庫」の中には直筆の署名入り本も何冊も見つかっている。「KIOTO 80」と署名されているのは、京都療病院時代の 1880 年に購入したものと推測される。ショイベの蔵書印と蔵書票は「蔵書印画像」ブラウザ画面で公開されている⁷。



図 12 展示室のショイベ文庫

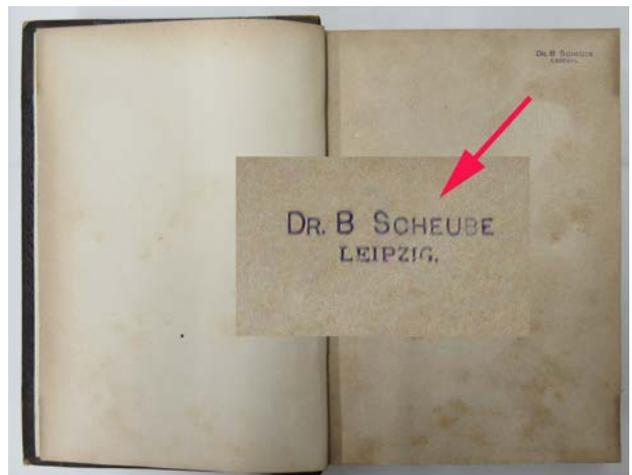


図 13 ショイベ蔵書印 (LEIPZIG)



図 14 ショイベ蔵書印 (KIOTO)

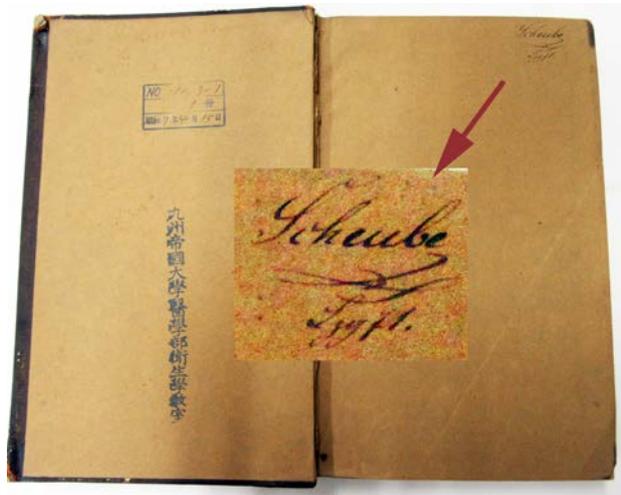


図 15 ショイベ自筆署名

6.2. ショイベ蔵書票

ショイベ蔵書票画紙の大きさは縦 11cm 横 7.8cm で、版画の大きさは縦 9.1cm 横 6.1cm で黒枠が付いている。赤色の鳥居と黒色の松が濃く強調して描かれ、蘆・川・橋・ショイベがドイツの母への書簡で「全地球上に 2 つとないほど美しい山」（森本 2011 p.111）と評した富士山等が淡いタッチのデッサン風に描かれている。歌川広重や川瀬巴水等が描いた浮世絵版画風にも見えるが、淡い部分はゴッホ等の印象派が描いた風景画のようにも見える。19 世紀後半に西洋では「ジャポニスム」が流行し日本の浮世絵版画も海外に流出し西洋の画家はその影響を受けている（大島 1992）。ショイベ蔵書票の下部の蔵書主ショイベの名前の下には西洋風のイメージシンボル図がある。

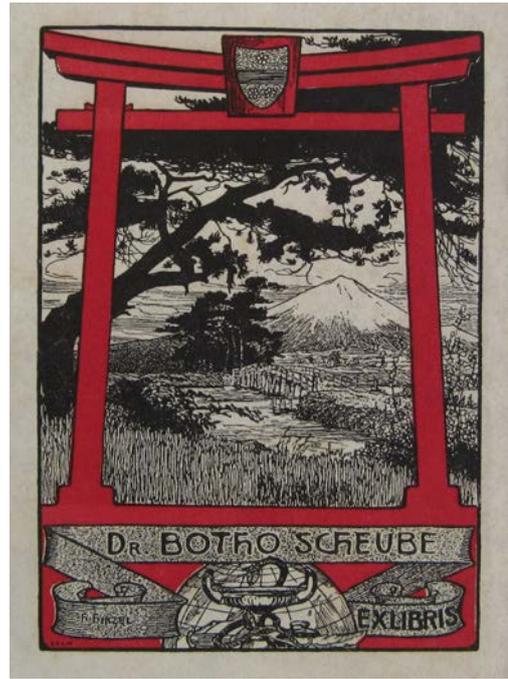


図 16 ショイベ蔵書票

鳥居は明神鳥居の形態をしていて楔・台石・額束などもある。額束には神社名が記されず、上部に 1 個、下部に 2 個のマークのような物が記されている。神社にはこのように「家紋」に該当する「神紋」があり徳川家康の家紋の「葵」の紋を有する神社もある事を研究開発室員のミヒェル・ヴォルフガング氏にご教示頂いた。調査すると神紋に関する研究書（丹羽 1974, 2016）があり、その中には全国 5 千近くの神社を調査し 120 種の神紋について記載されていた。図を見比べると京都・北野天満宮の「梅鉢」紋（丹羽 1974 p.90, 2016 p.96）がショイベ蔵書票の額束に描かれた図に似ていた。

北野天満宮の鳥居も明神鳥居で楔・台石・額束を有している。京都に滞在したショイベが学問の神様菅原道真公をまつる北野天満宮を詣でた事もあつたらう。ショイベが居住した京都荒神口（母への書簡の中で荒神とは日本の台所の神様の名前と説明している（森本 2011 p.41））にある「護浄院（清荒神）」の鳥居も明神鳥居である。



図 17 北野天満宮灯籠の梅鉢紋



図 18 北野天満宮鳥居

蔵書票にはよくモットーが記されているが、シヨイベの蔵書票には医学と薬学のシンボルが描かれている。蔵書票の下部の飾りリボンの中に「Dr. Botho Scheube」蔵書主の名前の下に描かれている絵には1匹の蛇が杯の下から上に顔を出し、杯の下にもさらに1匹の蛇がいるように見える。蛇と酒杯は医歯薬学のシンボルとして古くから西洋で用いられ（古川 1981）、薬店の看板に描かれる事も多い（古川 2002 カラーグラフ p.11-16）。「西洋では医学のシンボルとして「アスクレピオスの杖」を用いその杖には1匹の蛇がからまり健康・不老・長寿を象徴している」（古川 2002 p.iii）。薬学のシンボルとしてはヒギエイアの杯が最も多く用いられた（古川 2002 p.iii）。キリスト教では蛇が杯の中から現れるのはヨハネが毒を飲もうとした時に毒が蛇の姿に変わって毒が消えたという聖ヨハネの俗説がある（アト・ド・フリース 1988 p.566）。



図 19 北野天満宮狛犬の梅鉢紋

蔵書票の下部の飾りリボンの中の左下に蔵書票の作者ヒルツェルのサインがある。「H. Hirzel」。ブダペスト応用美術館の蔵書票コレクションの中にシヨイベの蔵書票が登録されている（Museum of Applied Arts）。データによると 1900 年にシャルロテンブルクで作成されている。「ヘルマン・ロバート・ヒルツェル」⁸が作成した蔵書票は Web 上でも見られる。植物画を好んだヒルツェルの蔵書票の作品の多くは植物がポイントになっている（Schweizerische Ex Libris-Künstler）。シヨイベの蔵書票では植物に代わり鳥居が鎮座しているように見える。日本で診療・研究・教育の傍ら日本の自然・文化遺産を大いに満喫し日本滞在延長を望んだシヨイベの日本での思い出が伝わって来る蔵書票である。



図 20 護淨院（清荒神）鳥居

7. おわりに

島崎正樹・藤村父子の蔵書印が押された『山陽文稿』は、版本としては明治初期に大量に出版されたありふれたものであり、現在でも古書店で2~3千円で購入で

きる程度のものである。ショイベ文庫の中には「重複本」として消印が押された本があり、場合によってはそのまま廃棄された可能性が高いものも含まれていた。こうした利用されることなく埋もれている所蔵資料を、蔵書印や蔵書票を手がかりに発掘し得るのは、図書館員以外にはあり得ない。

蔵書印や蔵書票は、利用頻度や稀少性といった、図書館でしばしば使用される資料の価値を判断する基準とは異なる、新たな価値を見出すものであり、死蔵された蔵書を活用する大きな可能性を示すものといえるだろう。

[謝辞]

本稿執筆にあたり研究開発室員のミヒェル・ヴォルフガング氏にお世話になりました。感謝申し上げます。

参考文献

- [1] Museum of Applied Arts Ex-libris MLT1686.3.32
<http://collections.imm.hu/gyujtemeny/ex-libris-bookplate/7244> (参照 2017-07-06)
- [2] PHARMA-ART
<http://www.pharma-art.de/html/hirzel.html> (参照 2017-07-06)
- [3] Schweizerische Ex Libris-Künstler: Hermann R. C. Hirzel
http://www.antiquariat-rieger.de/PDFs/Hirzel_Stickelberger.pdf (参照 2017-07-06)
- [4] Hermann Robert Hirzel, STEPHEN ONGPIN FINE ART
<http://www.stephenongpin.com/HIRZEL-Hermann-Robert-DesktopDefault.aspx?tabid=45&tabindex=44&artistid=201809> (参照 2017-07-06)
- [5] 青田寿美. “研究資源としての「蔵書印データベース」”. 公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集. 2016, Vol.21, 43-48p.
- [6] アト・ド・フリース著. イメージシンボル事典. 大修館, 1988, 755p.
- [7] 大島清次. ジャポニスム -印象派と浮世絵の周辺-. 講談社, 1992, 403p.
- [8] 岡山県教育委員会編. 旧閑谷学校歴史資料目録. 岡山県教育委員会. 1980, 160p.
- [9] 勝本清一郎. “若き藤村の愛蔵書”. 近代文学ノート. 第1巻, みすず書房. 1979, p.17-30.
- [10] 九州大学百年史編集委員会編. 九州大学百年史. 第6巻, 部局史編Ⅲ, 第28編, 附属図書館, 2017.
<http://hdl.handle.net/2324/1801801> (参照 2017-05-31)
- [11] 九州大学百年の宝物刊行委員会編. 九州大学百年の宝物. 丸善プラネット, 2011, 227p.
- [12] 宮内庁書陵部編. 書陵部蔵書印譜. 上, 宮内庁書陵部, 1996, 345p.
- [13] 久保尾俊郎. 磯淳の旧蔵書. ふみくら, 2010, Vol.79, p.10-11.
- [14] 国立国会図書館編. 国立国会図書館蔵書印譜. 青裳堂書店, 1995, 247p.
- [15] 黒龍会編. 西南記伝. 下巻二, 国龍会. 1911.
- [16] 柴田篤, 辺土名朝邦. 中村惕斎・室鳩巢. 明德出版社, 1983, 297p.

- [17] 神英雄. 明治期における新宗教と新聞報道 : 阿吶鉢囉婆教排斥報道を中心として. 龍谷史壇. 1999, no.113, p. 53-74.
- [18] 神英雄. “山県勇三郎と阿吶鉢囉婆教”. 歴史と佛教の論集 : 日野照正博士頌寿記念論文集. 自照社出版. 2000, p.411-428.
- [19] 竹林熊彦. 『英国薩道蔵書』の印. 九州大学新聞. 1930, no.26, p.4.
- [20] 長壽吉. 日間瑣細 (三) 蔵書沽却. 九州大学新聞. 1929, no.43, p.1.
- [21] 槌馬屋資料館制作. 資料写真による「夜明け前」への招待. 増補改訂版, 槌馬屋資料館, 2011, 117p.
- [22] 藤村記念館編. 島崎藤村 : 図録. 藤村記念館, 2009, 45p.
- [23] 中野文子, 山内敦子. 本学図書館所蔵古医書の紹介. 医学図書館. 1993, vol.40, no.1, p.88-95.
- [24] 丹羽基二著. 神紋 -神社の紋章-. 秋田書店, 1974, 254p.
- [25] 丹羽基二著. 神紋総覧. 講談社学術文庫, 2016, 313p.
- [26] 林豊. 九州大学学術情報リポジトリ (QIR) におけるDOI 登録. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2016, 2015/2016, p.12-20.
- [27] 藤田俊夫. 京都府療病院の外人教師たち -ヨンケル, ショイベ-. 臨床科学. 1986, vol.22, no.10, p.1327-1333.
- [28] 古川明. 医学・薬学・歯学のシンボルマーク -アスクレピオスの杖とヒギエイアの杯-. 歯界展望. 1981, vol.58, no.5, p.977-986.
- [29] 古川明. 医学と薬学のシンボル -アスクレピオスの杖とヒギエイア(ハイジア)の杯-. 歯歯薬出版, 2002, 162p.
- [30] 文教大学越谷図書館編. 清明文庫図書目録 : 立正学園所蔵旧清明文庫蔵書. 文教大学越谷図書館, 2006, 118p.
- [31] 町泉寿郎. 北米国立医学図書館に所蔵する日本古医書 (善本類を中心に). 日本医史学雑誌. 2009, Vol.55, no.2, p.218.
- [32] 宮入慶之助記念誌編集委員会. 住血吸虫症と宮入慶之助 -宮入員発見から 90 年-. 九州大学出版会, 2005, 277p.
- [33] 森本武利編著, 酒井謙一訳. 京都療病院お雇い医師ショイベ -滞日書簡から-. 思文閣出版, 2011, 332p.
- [34] 山根泰志. 忘れられた文庫たち : 中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2008, 2008/2009, p.27-30.
- [35] 山根泰志. 幻の国境線 : 廣瀬文庫『背振山塚図』とその周辺. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2014, 2013/2014, p.32-45.
- [36] 山室三良. “国宝玉篇と磯淳の最後”. 中国のこころ. 創言社. 1968, p.170-172.
- [37] 渡辺守邦, 後藤憲二編. 新編蔵書印譜. 青裳堂書店, 2001, 589p.
- [38] 渡辺守邦, 後藤憲二編. 新編蔵書印譜. 増補版, 青裳堂書店, 2013-2014.

1 附属図書館創設期の図書館員が、書物への造詣が深かったことは、九州大学百年史編集委員会 2017 を参照。第二代附属図書館長として附属図書館創設の任を担った長壽吉 (1880~1971) は、熊本の舒文堂で曲亭馬琴の蔵書印 (「瀧沢文庫」「曲亭文庫」「著作堂図書記」) が押された後藤点五経 (『春秋』は除く) を見出し、図書館の蔵書に加えている (長 1929)。初代司書官竹林熊彦 (1888~1960) は、萩野文庫本の中からアーネスト・サトウの蔵書印「英国薩道蔵書」を見出し、『九州大学新聞』において紹介している (竹林 1930)。

2 「画餅居士蔵書之記」が太田正隆の蔵書印であることは、

既に町 2009 に指摘がある。

3 藤村の旧蔵書を所蔵する馬籠の藤村記念館に問い合わせたところ、「島崎春樹」の印は確認できなかったとのことであった。

4 この「平重寛印」「嶋崎氏」印は、島崎正樹写『古道大意』（槌馬屋資料館所蔵）に押印された印と一致する。

5 西田文庫旧蔵者の西田縮堂（1831～1908）は、九州から出た形跡がないが、後に新興宗教阿吽鉢囉婆教教祖となる長子の西田鉄（1859～1921）は、その波乱の生涯の中で南は沖縄から北は北海道まで全国を駆け巡っており（神 1999, 2000）、各地で入手した書物を父に納めていた形跡があり（西田文庫『朱氏談綺』識語等）、あるいは鉄によりもたらされた可能性がある。

6 Heinrich Botho Scheube（1853～1923）ドイツのツァイツ生。1876年にライプツィヒ大学卒業後内科学教室助手として勤務。辞任後1877年11月から1881年12月1日まで京都療病院で教育・診療に携った。1時間講義の後回診、診察を行った。研究は脚気、寄生虫病、マラリア、伝染病、栄養について、アイヌ民族学等がある。日本ではライプツィヒ大学でブンダーリッヒ教授の同じ門下生の東京大学教師のエルウィン・ベルツ（1849～1913）と親交があり旅行や京都博覧会、内国勸業博覧会等に行き行った。京都府の予算削減により解雇され帰国。1883年1月よりライプツィヒ大学講師に就任。1903年にグライツ病院院長に就任。ロイス侯爵より枢密顧問医の称号を受ける。グライツで死去（森本 2011, 藤田 1986）。森林太郎（鷗外）が1884年から1年間ライプツィヒ大学留学時にショイベと晩餐会の会場で談話した記録がある（藤田 1986）。日本滞在中の1878年に谷赫也と結婚したが1年を経ずに離婚、離婚後娘ハルが誕生している（森本 2011 p.312）。

父ヒューゴ（Hugo Scheube, 1821～1880）はドイツのゴータで出版業務に携った。ポート・ショイベが在日中に死去した。ヒューゴ・ショイベ出版社で出版した図書の所蔵について調査すると九大では文系合同図書館（法学部所蔵）で1冊所蔵している。

<http://hdl.handle.net/2324/1000875746>

この図書の見返しを開くと「Strais and Kikuchi 4.9.17」と鉛筆書きが残されていた。受入年月日は昭和5年2月20日である。九州大学第9代学長を歴任した法学部の菊池勇夫（1898 - 1975）教授の旧蔵書の可能性もある。

7 蔵書票 DR. BOTHO SCHEUBE

<http://hdl.handle.net/2324/1801072>

蔵書印 KIOTO.

<http://hdl.handle.net/2324/1801073>

8 Hermann Robert Catumby Hirzel（1864～1939）

両親はスイスの商人。アルゼンチンのブエノスアイレス出生、スイスのジュネーブで幼少期を過ごす。薬学を修業後化学をジュネーブ、ベルリンで学ぶ。芸術家を目指しベルリン芸術専門学校で版画を学ぶ。風景画家 Karl Hagemeister（1848～1933）に師事する。1890年にイタリアに行き1893年に展示会に出品し風景を描いた銅版画で銀メダルを獲得。

ベルリンに戻り画家・版画家として活躍。1904年にロシアで綿の商売開始、1920年にベルリンに戻り商業デザイナーとして絵・蔵書票・宝石等の作品を制作した。花のデザインが多いのが特徴（STEPHEN ONGPIN FINE ART, PHARMA-ART）。蔵書票の作品集をベルリンの Fischer & Franke から出版した（Schweizerische Ex Libris-Künstler）。



図 19 ポート・ショイベ（京都府立医科大学所蔵）



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>